

6月度「京都学ラウンジ ミニ講座」(開催報告)

2020年6月25日
京都学・歴彩館
075-723-4835

京都学・歴彩館では、京都について学ぶ楽しみを広げる目的で、毎週木曜日に「京都学ラウンジ ミニ講座」を開催しております。この度6月4日(木)～6月25日(木)にかけて「世界の中の古代日本―海外からの文化・文物の移入―」と題して、4回開催しましたので、下記のとおり報告します。

記

■ 日 時 2020年 6月4日・11日・18日・25日
いずれも木曜日 13:30～14:00

■ 会 場 京都府立京都学・歴彩館 1階小ホール

■ 参加者数 15名(4日)、15名(11日)、23名(18日)、26名(25日)
合計 79名

■ 内 容

講師 京都府立京都学・歴彩館 京都学推進課 吉岡直人

「世界の中の古代日本―海外からの文化・文物の移入―」(全4回)

第1講 日出る処の天子、書を日没する処の天子に致す

―遣隋使が日本にもたらしたモノは煬帝の怒りか―

第2講 藤原京から平城京へ―遣唐使がもたらした衝撃―

第3講 新羅使がもたらした唐物―天平勝宝四年の新羅使との交易―

第4講 平安時代、海商の来航―唐物入手の多様性―

■ 講座の様子

2019年末からの新型コロナウイルスの世界的流行を背景に、外国からの人の移動が厳しく制限された。国内移動の自粛を強いられた日本人に加え、外国人観光客までもが観光都市京都から姿を消し、観光業をはじめ日本社会に大きな影響を与えた。このことは、現代の日本が海外との交通、人の往来の上に成り立っているという事実を浮き彫りにしている。

今から1000年以上昔の古代日本も、海外とは広範な交流を有していた。海外から日本にもたらされる海外文物(唐物)は日本文化の形成に多大な影響を与えただけではなく、国家体制の整備にも大きく作用していた。今月のミニ講座は海外文物の移入が持つ歴史的意義について、分かりやすく講義した。

再開館後すぐの開催ということもあり、数は少なかったものの参加者からは、以前と変わらず熱いまなざしが講師に向けられた。

会場内の三密を回避するため、会場を小ホールに変更して開催した。

